

ブラジル特報



特集 ブラジルのユダヤ移民

・ブラジルのユダヤ移民プレゼンス(その1)～歴史編



あの町この町
サンタレン Santarém

0円

新規会員募集中!

詳しくは協会へお問合せください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

あの町、この町

サンタレン Santarém

サンタレン市は、アマゾン河が支流タバジス河と合流する、マナウスとベレンのほぼ中間地点にある人口約33万人、パラ州第2の大都市圏を形成。天然ゴム、コーヒー、胡椒生産などで数回のブームの盛衰を経験、良港に恵まれ、最近では、大豆、トウモロコシ等セラード穀倉地帯北側の積出基地としても発展している。



1661年、タバジス族の本拠地にイエズス会宣教師たちが創設したアマゾン地域で最も古い歴史を持つ都市の一つで、カトリックと先住民の文化的遺産を引き継ぐ、「タバジスの真珠」とも呼ばれる美しい街である。

市街地から車で30分ほどタバジス河を遡ると大きな中洲があり、青く澄んだ水に白砂の美しいビーチが広がる世界的な観光地、アルテル・ド・シャン (Alter do Chão) がある。洒落たポウザーダや土産店が建ち並び、地元の伝統的な音楽、踊り、食べ物が楽しめる9月のサイレ祭りの時期を中心に、国内外から多くの



観光客が訪れる。この地域のアマゾン河水系では、季節により水位が5メートル近く変化し、雨季の12月～5月にかけて徐々に水位が上がり、4、5月頃には白砂のビーチは完全に水没する。人々はこのゆっくりとした自然の営みに身を任せて上手に生活しており、水が引いた後に氾濫原に残った栄養分たっぷりの土壌で作物を生産し、牛や馬を放牧する。

更に少し進むと、ベルテラの入口でもあったピンダバル・ビーチがある。ベルテラは、先行のフォードランディアとともに、米国フォード社が作った大規模ゴム農園があったところで、戦後、両農園に対して相当数の日本人集団移住が行われた。しかし、間もなく、事業を継承したブラジル政府が農園の閉鎖、邦人の強制退去を決定したため、全ての入植者たちは国内各地への転住を余儀なくされた歴史がある。

日系社会について、集団移住は無かったが、サンパウロ、トメアス他からの転住者も多く、製造業、商業など多方面で活躍されており、タバジス日伯文化協会の旗の下で活動が続いている。私が表敬訪問した当時の市長が、サンタレンの魅力について、ご自身の先祖が(米国の)南北戦争後の南軍の生き残りとしてこの地に渡ったことを挙げつつ、北東伯や南伯からの再入植者、日本人、米国人など外国人移住者と先住民が互いに偏見もなく共存しており、人種の垣越的な多様性がブラジルの中でも特に顕著な地域であると指摘されていたことが印象に残る。



日系社会について、集団移住は無かったが、サンパウロ、トメアス他からの転住者も多く、製造業、商業など多方面で活躍されており、タバジス日伯文化協会の旗の下で活動が続いている。私が表敬訪問した当時の市長が、サンタレンの魅力について、ご自身の先祖が(米国の)南北戦争後の南軍の生き残りとしてこの地に渡ったことを挙げつつ、北東伯や南伯からの再入植者、日本人、米国人など外国人移住者と先住民が互いに偏見もなく共存しており、人種の垣越的な多様性がブラジルの中でも特に顕著な地域であると指摘されていたことが印象に残る。

沼田行雄 (協会理事、元ベレン総領事)

目次

あの町この町
サンタレン [沼田行雄] 3

ブラジル・ナウ
急成長地帯・中西部にみる
穀物／人／街のダイナミズム
[『ブラジル特報』編集部] 5

【特集】ブラジルのユダヤ移民
ブラジルのユダヤ移民プレゼンス(その1)～歴史編
[岸和田仁] 6

ブラジルのクラシック音楽の夜明け
～アルベルト・ネボムセノとヴィラ＝ロボス～
[木許裕介] 8

第21回 FLIP(パラチ国際文学祭)に参加して
[毛利律子] 10

ブラジル現地報告
ブラジルのアフリカを訪ねて
[脇さやか] 12

新刊書・新盤紹介 13

連載・ブラジルあれこれ
『日本語が通じるアマゾンの片隅を旅する』
BBCのトメアスー報道をみる 13

連載・ビジネス法務の肝
ベッティング(賭博)法の成立
[柏健吾] 14

連載・勤どころ～税務&ホットトピック～
PEC 45/2019 税制改正の成立
[三上智大/天野義仁] 15

エッセイ
ブラジル音楽が紡ぐ人脈 by DJ ATSU-C
[DJ ATSU-C] 16

最近のブラジル政治経済事情 17

ジャーナリストの旅路
ブラジルはどれだけ食に恵まれているのか
[山口貴史] 17

連載・文化評論
クレオール文学作家マリーズ・コンデとブラジル文学
[岸和田仁] 18



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「サンパウロ中心部にあるユダヤ博物館。かつてシナゴグだった建物に、ホロコーストやブラジルのユダヤ移民の歴史、宗教に文化など多岐に渡り展示されている。ユダヤ系ブラジル人の老若男女が「ユダヤ人とは？」を語る映像が心に残った」
永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等。www.hikarunphoto.com

広島から Tudo Bem?

ブラジル在住の映像作家 岡村淳さんの上映会、トークイベント

上映会・トークイベント『ブラジル在住の映像作家 岡村淳の世界』が昨年10月に開催され、約20人が参加した。広島日伯協会の後援。

岡村さんは1987年にブラジルに渡って以来、映像作品を制作、発表。DVD化やレンタルをせずに、本人の立会いを原則とする「ライブ上映会」を行なっている。2013年にはじめての著書『忘れられない日本人移民 ブラジルへ渡った記録映像作家の旅』（発行：港の人）を刊行。ブラジルやアルゼンチンの被爆者の証言を撮影、ヒロシマへも熱い想いを寄せている。

今回のイベントでは、ブラジルの牧野富太郎と言われる橋本悟郎さんを扱った『花を求めて60年 ブラジルへ渡った植物学者』と、『60年目の東京物語～ブラジル移民女性の里帰り～』の2本が上映された。続いて岡村さんが両作品の舞台裏や後日譚を披露、軽妙なトークに会場が笑いに包まれる場面もあった。

岡村さんは「いろんな縁がある広島で上映会ができたのは嬉しい」と話し、他の作品も見たいとの来場者の声も受け、次回開催を約束した。



▲上映前に作品への思いを語る岡村さん

様々な切り口で魅力を伝えたい 「ぶらりブラジル」初開催！

音楽やグッズ、時事ネタなど様々な切り口でブラジルを感じるイベント『ぶらりブラジル』が1月、広島市内のイベントスペースで開かれた。広島を中心に活動するショーログループ「ボッサ・ノ・アール」のみちこさんが企画・主催した。

誰でも参加できるオープンマイクスタイルで、ギターや歌、管楽器で奏でられるリズムにとメロディに乗せ体を揺らす人も

いた。広島に住むブラジル人も含め約20人が参加した。

会場にはリオの有名なサンバチーム「マンゲイラ」の衣装が飾られ、カーニバルの映像を見ながら、現地の熱狂ぶりなどが紹介された。

訪れた人は「ブラジル好きな人が集まる場所が広島にはないので、こういうイベントはいいですね」と笑顔を見せていた。

地元のラジオ番組で長くブラジルの魅力を伝えてきたみちこさんは「初開催だったけど、みなさんに喜んでもらえたと思う」と話し、次回開催にも意欲を見せていた。



▲会場はブラジルへの熱い思いで溢れた

会場のカフェもブラジルがテーマ

同イベントの会場となった kitokoi（樹と鯉）の店長の堀江裕介さんはブラジルに16年住み、昨年帰国した。親戚の誘いで渡ったブラジルに魅せられ、サンパウロのリベルダーデ地区でたこ焼き屋として日本の食文化も伝えてきた。

店内では、ブラジルのコーヒーやブジンを提供、関連の書籍も揃える。月に一度フェイラ（マルシェ）も開催、パステルの販売も行っている。

堀江さんは「多くの移民が出たのに広島ではブラジルのことがあまり知られていない。今後も歴史や魅力を伝えていく場所にもなれば」と話していた。

▲店の入り口に立つ堀江裕介店長▶



広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター（県人会）と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長（6代目、2020—）は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。



急成長地帯・中西部にみる ～穀物/人/街のダイナミズム～

ブラジルにはかつてサトウキビ、コーヒー、天然ゴムなどの収穫によってそれぞれの産地が繁栄し、多くの都市が誕生・拡大したという経験がある。近年はその現象が中西部で観察できる。国内5地域別の一人当たりGDPをみると、中西部は2010年代後半から南東部を抜いてトップに立っている。大豆・トウモロコシの生産がもたらした豊かさである。地域別失業率は南部に次いで低い。

穀倉銀座を貫く国道163号

この状況を象徴するのがマットグロッソ州である。ブラジルの大豆生産量のほぼ半分は中西部が占め、なかでも同州は全国の3割と断トツのシェアを誇る。近年、同州の失業率は州別で最低水準であり、収穫が好調だった昨年の7-9月期には2.4%と、現在の算定方式になった2012年以来初めて2%台に低下した（同じ時期の全国平均は7.7%）。

州都クイアバから国道163/364号を北上すると、穀倉銀座ともいえる光景が広がる。道の両側には延々と農地が広がり、国道沿いにいくつもの巨大な貯蔵庫が建ち並ぶ。トラック基地も多い。筆者が訪れた2023年8月時点では収穫自体は終わっていたが、数えきれないほどの大型トラックとひっきりなしにすれ違った。収穫物を積み、鉄道の貨物駅がある同州南部のロンドノポリス方面に向かう車両である。

国道はソヒーゾやノヴァ・ムトゥンといった州内屈指の大豆生産量を誇る自治体を通り抜ける。いずれも歴史が新しい自治体である。街中に入ると、給油所、車関係の修理・サービスセンター、農機などの農業関連会社、運転手向けの宿泊所など、農業活動のための施設が目立つ。

他州から農業投資家や労働者

筆者はブラジル農牧研究公社（Embrapa）の研究者と会うため、ソヒーゾよりもさらに北にあるシノッピという人口20万人の市を訪ねた。クイアバから500キロメートル離れており、生物群系としてはセラード地域を抜けてアマゾン地域に入る境界域にある。1972年からパラナ州など南部出身者が大勢入植し、1979年に市となった比較的新しい自治体である。大豆生産で本格的に成長したのはこの20年間であり、2022年の市の人口は2000年比2.6倍になった。

新しいだけにきちんと都市設計されている。車道は格子状に広がり、市内幹線は片側2車線ずつで中央分離帯は植樹され、きれいな街である。交差点にはほとんど信号がなく、ラウンドアバウトが整備されている。街の建設は現在進行中

あり、最近では空港の拡張が進んで新路線が開設され、新しい病院も誕生し、郊外に開発が広がっている。

農牧研究公社のシルヴィオ・スベラ博士（シノッピの研究所における作物・土壌研究者）によると、大規模農地の所有者はパラナ州の日系人を含めて南部の農場主が多いという。マットグロッソ州の農業は規模が大きい分、南部と比べて利益も大きいためである。他州からの投資家としての側面をもつ彼らはシノッピなどの都市部に居住している。

農作業は高度に機械化されているため、働き手は農民というよりも労働者と位置付けたほうがいい。スベラ博士によれば、より良い賃金にひかれて他地域から多くの労働者が来ている。トラックやコンバインの運転手は南部に比べて倍の報酬が得られるという。

研究所のラウリマール・ヴェンドルスクーロ所長は「シノッピではインフラも小売りなどのサービスも何もかもが足りない」と指摘する。たとえば、国道163号の片側一車線区間。ここで交通事故があると物流は長時間止まる。貨物鉄道をロンドノポリスから北方のアマゾン川方面まで延伸する計画があるが、開通するのはもっと先のことになりそうだ。

持続可能な農業をめざして

大豆生産の適地の決定要素として、雨量、標高、土壌、耕作可能な土地の面積などが挙げられる。総合的にみて、マットグロッソ州は大豆とその裏作としてのトウモロコシ、綿花の栽培に適した広大な土地に恵まれた。スベラ博士は「不耕起栽培の下で毎年、土壌に石灰と肥料を投入し続け、わらの被覆を維持することによって、ここの農業は持続可能」という。

もっとも、今年の中西部経済は干ばつによる昨年第4四半期の播種の遅れで減速が見込まれる。法定アマゾン地域の開発が環境・気候変動をさらに悪化させれば、その影響は将来、ブーメランのように農業に返ってくる可能性もある。シノッピの研究所在環境負荷の小さい農・畜・林産物の生産システム開発を使命として掲げるのも不思議ではない。

主要作物の移ろいによって成長の中心地が移り変わり、人の新たな移動が発生するのは、ブラジルのように一次産品が豊かな大国ならではの現象である。中西部で観察できる景色は、東京一極集中が進んだ日本の高度成長期とは本質的に異なる。繁栄を資本・技術の集積につなげ、より複合的かつ文化的で魅力のある地域に発展させることが中西部の課題になるだろう。

松野哲朗（中大・神奈川大・東京外大非常勤講師）

▲河岸のステージではカポエイラやボサノヴァも披露された

ブラジルのユダヤ移民プレゼンス(その1)

～歴史編～ 岸和田仁(『ブラジル特報』編集人)

在ブラジルのユダヤ人とは

ブラジルのユダヤ関連サイト(netjudaica.com.br)によれば、2005年時点での全世界のユダヤ人口は、約千五百万人で、国別順位では、①米国(約590万)②イスラエル(約520万)③ロシア(約72万)④フランス(約61万)、⑤アルゼンチン(約39.5万)、⑥カナダ(約39.4万)、⑦イギリス(約30万)、⑧ウクライナ(約14万)、⑨ドイツ(約10.7万)、⑩ブラジル(約10.5万)となっている。

ブラジルの都市別のユダヤ人住民数は、ポ語版ウィキペディアによれば、①サンパウロ75,000②リオデジャネイロ40,000③ポルトアレグレ15,000④クリチバ1,770⑤ペロオリゾンテ1,700⑥レシーフェ1,300⑦ブラジリア1,100となっている。この数字からいえることは、ブラジルの全人口(約2億1千万)の0.1%にも及ばないので、ユダヤ人はブラジルにおいてはマイノリティーといえる。

この在ブラジルのユダヤコミュニティの規模を理解するためにも、関連団体の数などをざっくりとみてみよう。

- 前述のユダヤ関連サイトによれば、
- 1) ユダヤ援護協会/文化協会のサイト数は25
 - 2) ユダヤ系学校はサイト数21
 - 3) ユダヤ系新聞・メディアのサイト数13
 - 4) クラブ/スポーツ協会はサイト数6
 - 5) 女性団体はサイト数4
 - 6) 商店(本屋、食材、アートetc)はサイト数10

7) シナゴグのサイト数30となっている。

すなわち、HPを公開しているユダヤ文化協会がブラジル全体で25、シナゴグ(ユダヤ教会堂)が30ある、ということだ。ブラジル社会におけるユダヤ人プレゼンスの大きさはこうした数字が物理的に示すサイズを遥かに凌駕していることは言うまでもなく、経済界でもアカデミズムの世界でも政治や司法界でも、さらには文学や芸能・メディアの世界でも活躍するユダヤ系の有力者は数限りない。今回は、このユダヤ系のブラジル移民の歴史を略述することとし、実際の各界における活躍状況については、次号でレポートしたい。

ブラジルへのユダヤ移民史概略 第一の波

ブラジルへのユダヤ移民史には、大きく分けると二つの波がある。第一の波は16世紀、第二の波は19世紀末から20世紀前半にかけて、である。

1630年から1654年までのオランダによるノルデスチ占領期、多くのユダヤ人がオランダからベルナンブーコへ到着した。これは背景としてイベリア半島で広まった異端審問というユダヤ人迫害から逃れるには、便宜的にキリスト教に転向するか、当時、宗教の自由が保障されていたオランダへ移住するしかなかった、という歴史がある。

ユダヤ人流入最盛期の1640年前後のベルナンブーコにおけるユダヤ人(+新キリスト教徒)人口は約1400人と推定されているが、当時のベルナンブーコの白人人口は1万ほどと推定されているので、白人の14%ほどがユダヤ系であった。(別の説によれば、白人人口は4万、ユダヤ系人口は5千人と推定)。彼らの呼称はGente da Nação Judaica Portuguesa(ポルトガルユダヤ民族の人たち)というものであった。彼らは、当時の先端ビジネスであったサトウ



▲再建された米大陸最古のシナゴグ(現在記念博物館、2001年開館)

キビ栽培・粗糖加工に従事していたが、当時(17世紀中頃)の植民地ブラジルの全輸出額の9割が砂糖関連であり、このビジネスのほぼ5割をユダヤ系が牛耳っていた。

彼らによって1641年レシーフェの中心街にユダヤ教会堂(シナゴグ)が設立されるが、このKahal Tsur Israelは、南北アメリカ大陸で最初のシナゴグであった。

このユダヤ人サトウキビ事業の栄光の日々は、残念ながら、長く続くことはなく、1654年オランダ軍がポルトガル軍との戦いに敗退してしまっただけでなく、ユダヤ人の多くは、本国オランダやカリブへ帰国ないし移住することになる。この海外脱出組の一部であった23人が海賊に襲われたりしながらカリブ経由でニューアムステルダム(現ニューヨーク)へ到着する。当時のマンハッタン島はオランダのカルヴァン派新教徒による開拓、集落形成が始まったばかりで島の全人口は700名ほどでしかなかったから、サトウキビで栄えた人口1万人以上の先進都市レシーフェから北の僻地への移住であった、というのが当時の時代感覚であったはずだ。そんな彼らこそ、北米におけるユダヤ移民のバイオニアたちである。このファクトがユダヤ史の歴史書ばかりでなくニューヨークの歴史関連書でもきちんと掲載され、再評価されるようになったのは、つい最近のことではない。ちなみに、このユダヤ人ディアスポラの北

米到着というテーマは、2018年リオのカーニバルで老舗サンバチーム、ポルテラが取り上げ、海賊を模したシーンもあれば自由の女神のメタファーもあったりと話題になった。

こうした国外脱出を選択せずノルデスチ永住となった人たちの多くはノルデスチ内陸部へ落ちのび、いわば“ユダヤ落人”となったが、彼らはブラジル社会に浸み込んでいったため、彼らの末裔たちは、ユダヤ人としてはカウントされていない。もし370年前のユダヤ人のご先祖様を持つ人たちをユダヤ人としてカウントしたら、数十万どころか百万以上になるのではともいわれている。

ユダヤ移民第二波

1871年、ドイツにおいて最下層民ユダヤ人へ市民権与えられたが、これがかえって反ユダヤ主義拡大をもたらすことになり、19世紀末から20世紀初めにかけて、東欧・ロシアにおけるポグロム(ユダヤ迫害)が広範化する。こうした背景から1880年代以降アメリカ大陸へのユダヤ移民が本格化するが、移住先は①米国、②アルゼンチン、③ブラジル、④カナダなどであった。

統計数字がはっきりしている1925年から1930年までの期間にブラジルに移住したユダヤ移民の到着港別の数字は、①リオ:15,369②サントス:7,651③レシーフェ:234④サルヴァドール:113、となっている。

第二次大戦中(1940-45)ナチスによるホロコーストの犠牲者数は600万とも900万ともいわれるが、1947年、国連総会にてパレスチナ分割決議が採択されたことで、翌1948年、イスラエルの独立が宣言された。

この期間(1939年から1947年まで)のユダヤ人移民総数は325,654人で受入国別の人数とパーセントを列記すると、①米国:168,053(51.6%)、②パレスチナ:124,307(38.1%)、③ブラジル:12,884(3.9%)、④アルゼンチン:11,725(3.6%)、⑤カナダ:7,785(2.3%)となっている。

(出典: Jeffrey Lesser "Welcoming the Undesirables")

19世紀末から1950年代までのブラジルへのユダヤ移民総数は、およそ7万人とみられているので、戦前戦後合わせたブラジル日系移民の総数約24万人のほぼ三分の一ということになる。

2009年4月18日 レシーフェのシナゴグにて

レシーフェ市旧市街のボア・ヴィスタ地区。現在は雑然とした商店街となっているが、マルチンス・ジュニオール通りの中ほどに、薬局、軽食堂、雑貨屋などに挟まれて、幅10m奥行き30mの小さなシナゴグがある。20世紀初頭、当時のウクライナやロシアで吹き荒れたポグロム(ユダヤ人迫害・虐殺)から逃れたユダヤ人たちが、1910年、とりあえず持ちまわりで集会所を設け、それから資金を出し合って、1926年このシナゴグを創設したのである。多くのアシュケナージ系(東欧系)ユダヤ人は米国やアルゼンチンに移住したが、ブラジルにも少なからぬ数の人々が来たことは周知の通り。その多くはサンパウロ、リオ、ポルトアレグレに住み着いたが、レシーフェにも延べにして千人近い人たちが到達したのである。

このシナゴグは、作家クラリッセ・リスベクトールも少女時代通ったことで有名だが、第一世代が全員亡くなり第二世代・第三世代が地元ブラジル社会へ適応・統合されるに従い、通う人数も激減し、1980年代にはほとんど放置されていたが、21世紀に入って再興運動が展開され、今日では毎週土曜日に集いがなされるようになっている。このユダヤアイデンティティ復興運動を主導しているのが、ベルナンブーコ連邦農科大学教授ジャック・ス・ヒベンポイン(ユダヤ系三世)である。2009年4月18日の土曜日、午後4時半から、このシナゴグの復興を記念し、その歴史を記録した冊子の出版記念イベントが開催された。部外者の筆者も友人のジャック教授経由で招待状をいただいたので、スケジュールをやりくりしてこのユダヤ人コミュニティの集会に参加した。(参加者は百数十名であったが、アジア系は筆者のみであった。)

記念冊子のタイトルは、「レシーフェ・イスラエリッタ・シナゴグー門戸を開放して」、執筆者は、ジャック・ス・ヒベンポイン、ジョゼ・アレシャンドレ・ヒベンポイン(農学研究者、歴史家、ジャックの父)、ワルデニオ・ポルト(医者、作家、ベルナンブーコ文学アカデミー総裁)の三名だ。レシーフェ地区の東欧系ユ

ダヤ人の歴史、ユダヤ人全般の歴史、さらには17世紀の植民地期オランダ占領時期(1630-1654年)から本格化するイベリア系ユダヤ人の歴史まで概観する内容で、300部限定出版。

ベルナンブーコにおけるユダヤ人のプレゼンスがはっきりとみえる時期は、大きく二つに大別できる。オランダ占領期の1630年から1654年まで、と20世紀の1910年から1980年まで、の二つである。

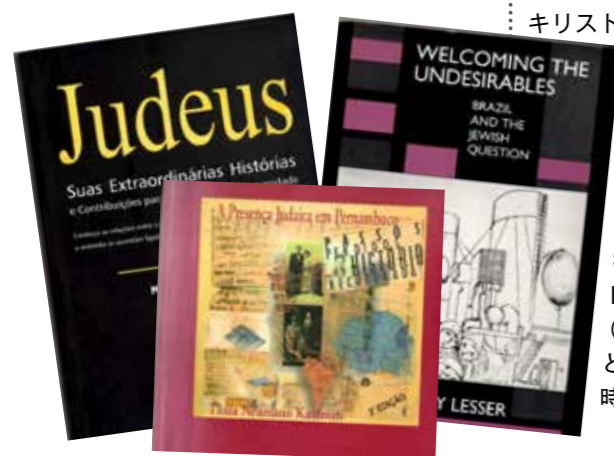
前述した如く、ロシアやルーマニア、ウクライナなどにおけるポグロムから逃れたアシュケナージ(東欧系)ユダヤ人が20世紀初頭から1920年代にかけてレシーフェにも移住し、第一世代は主に商人として活躍する。1940年代には中心街に40軒ものユダヤ人経営商店(雑貨から書店まで)があったが、二世、三世へと代替わりするにつれて、活躍の分野が商業、金融業から自由業(弁護士、医者、学者、大学教授)や公務員へと広がっていく。一方、彼らのアイデンティティ確認文化運動としてのイディッシュ演劇は1920年代から40年代が最盛期で50年代以降はシオニズムをめぐるイデオロギー対立もあって運動として衰退していった。ユダヤ系二世や三世による、ユダヤアイデンティティ復興運動がノルデスチで具現化するのには1990年代以降である。

登記上は1927年5月16日に開設されたSynagoga Israelita da Boa Vistaが、1987年約款を改定してSynagoga Israelita do Recifeへ改名、2006年Associação Cultural Synagoga Israelita do Recifeとなってユダヤ教会復興活動が進められたことが、この日のイベントで再確認されたのであった。



記念パンフレット(裏面)▶

Synagoga Israelita do Recife 誌録冊子S表紙▶



ブラジルのクラシック音楽の夜明け アルベルト・ネポムセノと ヴィラ＝ロボス



木許裕介 (指揮者、日本ヴィラ＝ロボス協会会長)
(c)Yasutaka Eida

ヴィラ＝ロボス評伝を 書き終えて

指揮者として日々楽譜に向かい合い、自分なりの音楽を作り上げていくことと同様、本を書くということも同様に、自分で無数の問いを立て、それに答えていく作業である。問いが次の問いを生み、その問いが、思いも寄らなかった地平へと自分を導いていく。昨年3月に上梓した評伝『ヴィラ＝ロボス - ブラジルの大地に歌わせるために』(春秋社)もまた、ブラジルに渡ってそのように書いたものである。500頁を要しながらも、そこで描くことができたのは執筆中に無数に生じた問いに対するほんの一部の答えにすぎないのだが、どうしても知りたかった問いには応えることができたように思っている。

ブラジルのクラシック音楽史は、ヴィラ＝ロボス以前／ヴィラ＝ロボス以降で

史』として結実させたいと思っているが、ここではヴィラ＝ロボス以前の音楽家をひとり紹介してみたい。それは、アルベルト・ネポムセノのことだ。

音楽家ネポムセノとは

ネポムセノは1864年7月6日にフォルタレーザで生まれ、1920年10月16日に56歳で没したブラジルの作曲家である。1864年といえば、ブラジルはまだドン・ペドロ2世の帝政期にあたり、ネポムセノはブラジル・クラシック音楽の創始者たるカルロス・ゴメスにつく存在として知られている。

当時のブラジルの音楽家たちは、音楽学校に行く以前より両親から楽器を教わり音楽に関心を持つことがほとんどであったが、ネポムセノもまた同じく、ヴァイオリンとオルガンを弾く父にレッスンを受けることから音楽人生を始めた。8歳でレシーフェに移住。1880年に父が亡くなってからは印刷会社で働きながら、音楽の勉強を続ける。

1885年にリオデジャネイロで初のピアノリサイタルを開催。チェリストのフレデリコ・ナシメントと出会い、ナシメントと二人で1886年からブラジル北部と北東部をまわって民謡を収集した。1887年にフォルタレーザでもコンサートシリーズを開催。

ネポムセノは当時の奴隷制度の廃止運動に強く賛成していたため、作曲家としての実力にも関わらず政府からの奨学金を得られず苦しんだが、こうした演奏会の成功によって資金調達に成功し、1888年からローマのサンタ・チェチリア音楽院に留学できることになる。(なおブラジルの奴隷制度廃止は1888年)1889年以降はドイツにも留学できるようになりシュテルン音楽院で学ぶ。ブラームスの友人のヘルツォーゲンベルグに作曲を師事。マックス・ブルッフにも師事したらしい。音楽院ではピアノをテオドール・レシェティツキーに師事し、同じクラスに所属していたグリーグの弟子であるピアニストのヴァルボルク・バ

ンと出会う恋に落ち、1893年にオスロで結婚。このとき、グリーグの家にも挨拶に行ったようで、ナショナルな音楽を志向していたグリーグから自国の音楽文化を反映させた楽曲を書くことをアドバイスされたことが作風の転換点となったとされる。

1894年にベルリンフィルで自作の「スケルツォ」などを指揮。同時期、リオの国立音楽学校でオルガンの教授ポストを約束されたが、オルガンを教えるためにより研鑽を積む必要を感じ、パリに渡り、アレクサンドル・ギマンのもとで学ぶ。このパリ滞在中にサン＝サーンスやヴァンサン・ダンディとも出会ったり、ドビュッシーの「牧神の午後への前奏曲」初演に立ち会ったりもしたらしい。

母国語によるクラシック音楽

1895年にブラジルに戻ってからは精力的にコンサートを指揮し、ベルリン滞在中に知ったワーグナーの音楽を頻りに紹介。さらにはドイツ語、フランス語のテキストによる曲のみならず、ポルトガル語のテキストによる自作曲を上演したところ、当時の保守的批評家であるオスカール・グアナバリーノに酷評される。(当時のブラジルでクラシック音楽の歌曲といえば外国語で歌うのが当然で、ポルトガル語で歌うということは「ポピュラー」つまり「俗な」音楽に限定されたことであった)

これに対してネポムセノが言い返した、「母国語で歌わない人間に祖国はない!」(Não tem pátria um povo que



▲エリゼウ・ヴィスコンティによるアルベルト・ネポムセノの肖像。1895年作成、油彩

não canta em sua própria língua.)という言葉は、ブラジルのクラシック音楽の夜明けを表す象徴的な言葉として知られている。

以降、「ポピュラーコンサート協会」(Associação de Concertos Populares)を10年にわたり指揮してブラジルの音楽文化の改革に尽力。1897年8月1日に「交響曲ト短調」を初演。ほか「ブラジル風連作」なども初演。当時の保守的批評家たちは、「ブラジル風連作」最終楽章の「パトゥーキ」にブラジルの民族舞踏で使われる楽器たるヘコヘコ(ギロと同種の打楽器)が入っていることに激怒したらしいが、ネポムセノはポリシーを曲げることなく、国民派派的な活動を展開し、その後ブラジルを代表する作曲家として認められるようになっていく。

1902年、前任のレオポルド・ミゲスにかわってリオデジャネイロの国立音楽学校の院長に就任。当時のブラジルでは入手が困難だった、サティなどのフランスで活躍する作曲家たちの楽譜のコピー



▲ブラジルクラシック音楽の数々を初演してきた、マエストロ・ホベルト・ドゥアルテを
を図書館に収蔵させる。どうやら若き日のヴィラ＝ロボスはパリに渡る前にこれらの楽譜を何かしらの方法で見ることによって自身の作曲スタイルに反映させていたようで、ネポムセノのこの施策がなければ、ヴィラ＝ロボスの作曲家としての深化は随分と遅れていたことであろう。

しかし国立音楽院の院長のポストは、保守的思考をもった他の教授たちと折り合いが合わず僅か一年で退任。(のち、1906年に院長に再就任し、1916年まで同ポストを務める)1908年、ブラジルで開かれた博覧会において26のコンサートを企画する責任者となり、主にフランスとドイツの作品と、グリンカやポロディン、グラズノフ、リムスキー＝コルサコフといったロシアの国民楽派の作



コロコバードの丘から

作曲家たちの作品を紹介。

1910年からブラジル政府使節としてベルギー、フランス、スイスを回り、自作を含むブラジル音楽を指揮し、このときドビュッシーとも知己を得た。この前後でマーラーとも交流があったらしい。1918年には第一次世界大戦終結を記念して「戦争」交響曲を書く予定だったが、主催者と折り合いがつかずこの仕事を降りたところ、代わりにヴィラ＝ロボスに白羽の矢が立ち、物議を醸したヴィラ＝ロボスの「戦争」交響曲が生まれる。(ヴィラ＝ロボスにとっての交響曲第3番にあたる。当初構想は164人の演奏者を必要とする超巨大編成で、「ラ・マルセイエーズ」が引用されたりする)

ヴィラ＝ロボスとの関係

1920年6月、ピアニストのアルトゥール・ルビンシュタインがリオにやってきて、ヴィラ＝ロボスの元を訪れる。ヴィラ＝ロボスと面会しようとしたが断られたルビンシュタインは、その後会食でネポムセノにヴィラ＝ロボスが会ってくれなかったという話をしたところ、ネポムセノは皮肉をこめて「ヴィラ＝ロボスは、自分がブラジルの最も偉大な作曲家だと思っているのだ」と答えたという。(その数日後にルビンシュタインとヴィラ＝ロボスは会うことができて、これがヴィラ＝ロボスにとっては人生を変える運命の出会いとなった。)

ネポムセノは自分以上に革新的で自信家な後輩であったヴィラ＝ロボスに手を焼いたらしいが、ブラジル音楽の改革者として、同じくグアナバリーノに酷評されているヴィラ＝ロボスに共感を覚えていたのか、ヴィラ＝ロボスの初期作品を出版するために出版社に繋ぐなど、実はヴィラ＝ロボスのことを影から応援している

のである。

1920年9月、リヒャルト・シュトラウスがウィーン・フィルを率いてブラジルツアーを行った際に、リオにてネポムセノのオペラ「O Guaratujá (いたずら小僧)」の序曲が演奏されるなど、ネポムセノが1920年のブラジルを代表する作曲家であったことは間違いない。このオペラは未完とはいえポルトガル語で歌唱されるオペラとして最初のものであり、ブラジル音楽史における最初のブラジル・オペラとして位置付けられている。

ブラジル国歌の編曲

このようにポルトガル語を堂々と自作に導入したことが、先行するカルロス・ゴメスとネポムセノを大きく分かつポイントである。なお、様々なバージョンが入り乱れていたブラジル国歌を整理したのもネポムセノであり、国歌に歌唱が入るときにはネポムセノ編曲によるホ長調バージョンで演奏することがブラジル国家の法律で定められている。(管弦楽のみの場合は変ロ長調)

ネポムセノは、未完の「いたずら小僧」を含め4つのオペラ、「セレナータ」などの管弦楽、三曲の弦楽四重奏曲(第3番の副題は「ブラジレイロ」)を含む室内楽、「古風な組曲」などのピアノ作品、70曲以上の歌曲などを残す作曲家として当時をリードしたのみならず、教育者として、ヴィラ＝ロボスをはじめとする次世代の音楽家を育て、応援し、ブラジルのクラシック音楽の夜明けを導いた。まさしくネポムセノは、「ブラジル・クラシック音楽におけるナショナリズムの父」(O pai do nacionalismo na música erudita brasileira.)と呼ばれるに相応しい存在なのである。

▲ヴィラ＝ロボス博物館に蔵を頂き研究
中庭の豊かな植物が美しい

第21回 FLIP (パラチ国際文学祭)に参加して



毛利律子
(在サンパウロ)

「温暖化ヒートフリップ」へようこそ

パラチ国際文学祭—FLIPは、ブラジルのリオデジャネイロ州パラチ市で2003年から毎年、通常7月上旬に開催されている文学祭であるが、コロナパンデミック騒動で延期され、今年は11月22日から26日までの開催となった。コロナ禍を乗り越え、めでたく21歳になったフリップということで主催者側の力の入れようは、設備の拡大などでも十分うかがえたが、なにしろ暑い！開会の挨拶に立ったエンブラトゥール（観光公社）の会長の言葉が端的に、「温暖化ヒートフリップへようこそ！」であった。

温度計は40度というが、体感温度は50度超えてるんじゃない！というほどの炎天下。入り江の町なので海風が多少暑さを和らげてくれるが、リフォーム中のポザータ（ペンション）で作業中の大工たちは、「毎日何杯ものバケツの水を被るのが仕事だ」、とうんざり顔で話していた。

「文学祭するなら秋でしょう。猛暑で本なんか読めるか！」とは参加者の怒りと不満の声。式典でのパラチ市長のルチアーノ・ピダル氏もオープニング・カクテルパーティーで、「7月が祭り開催には理想的な季節。しかし今や、パラチには季節がなくなりました。」と述べ、執行委員も、「私たちは7月開催のために戦いましたが、今年は資金不足のため実現しませんでした。」と言い訳を並べていたとのこと。

という猛暑の中で開催された模様と、ここでの酷暑期の開催はどうしてダメなのか。その理由を、今回の体験からの独断的偏見の意見を後程、縷々述べることにしよう。

熱射と雷雨もなんのその…？

FLIPは各国からの文学者たちの講義、ディスカッション、文学ワークショップに加えて、特に、子供たちの識字率向上と、本に親しむ文化づくり推進のため、子供たち（Flipinha）や若者（Flipzona

）を対象としたイベント開催も中心テーマの一つである。今回も、各所で、引率の先生と生徒の団をよく見かけた。その子たちと対照的に、同じ年頃のインディオの物売りや物乞いの子供たちが町角に寄り集まっている。

主催者たちはこの状況をどのように考えているのだろう。FLIPの歴史では、インディオ文学紹介も盛んなようであるが、このことを市役所の人に聞いてみた。すると、「彼らは観光資源の一つであり、特に問題なく結構上手に生活している」と、すんなりかわされてしまった。ユネスコの歴史的保護区と指定されている社会の混沌の一面である。

さて、創立者の一人、リス・カルダー氏は、「他国の作家をブラジルに連れてくることで、ブラジル文学は海外でよりよく知られるようになった」と、フェスティバルの世界的な評判の高まりにご満悦だそうだ。

確かに、彼女の功績は多くのブラジル作品を世に出し、それによって数々の栄誉を受けている。2003年からパラチ国際文学祭の会長を務め、翌年、ブラジル国家南十字星勲章と文化功労勲章を授与された。カルダー氏のことをもっと知りたくなり、会場周辺で名札をかけたスタッフに彼女のことや、FLIPについて聞いてみたが、誰も何も、名前すら知らない。理由は、当日のスタッフ一同は皆アルバイトであり、責任者という人物に行き着くのはほぼ無理な話。気の利いたスタッフが、ネットのサイトを教えてくれたが、今はそういう時代だと痛感するのである。

灼熱の太陽の下、参加者はほとんど

日傘をさしている。

歩きながら扇子を振る人に混じって、至る所で小さな扇風機をかざしている人が多いのには驚いた。ちょっと声を掛けると、「これは日本製だよ。〇〇製はすぐモーターが焼けるんだ。日本製は絶対安心だよ」。恐るべし日本の暑さ対策。地球の裏側の小さな町で大評判である。どこで買ったかと聞くと、本通りにある日本人の「何でも屋」で売っていると教えてくれた。

22日、青天の空は夕方からにわかにかき曇り、オープニングショーが、名所サンタ・リタ広場に設定された200席収容の巨大テント会場で始まった。夜、大画面に有名なアドリアナ・カルカニョット（Adriana Calcanhotto）が登場し、彼女のダイナミックな歌声とトークショーが大音響と大喝采の中で始まった。ところが夕闇の上空ではそれを上回る雷軍団が時々激しい雷鳴を響かせて走り回る。案の定大雨となり、せっかくのショーを楽しんでいられる雰囲気ではない。大画面の映像も途切れ途切れになり、歌声は聞こえない。それでも観客は「雨なんてすぐに止むさ」と、リズムに合わせて踊っているから、何と素敵な人々かと感心させられた。

今年の会場設定は、海岸沿いや、市内最古の教会の前の広場など、特別に建てられたテントがいくつも設置された。広場の横の巨大テントの書店には日系作家の作品も並べられていたが、手に取ってみる余裕がなく、名前も失念した。各会場の入場料はほとんど無料だが、イベントとテーブルのチケット価格は65レアイス（半額）からだった。プログラムの



▲巨大テントの書店内部

メインストリームの一つ、シネマ上映は設定の日時に間に合わず見逃してしまったが、カーザ・クルトラルでの講演は興味深いものだった。今年は女性作家作品が数多く紹介され、町の角々で、インタビューアに、誇らしげに答える若い女性作家がカメラに納まっていた。

浮上したモダニズムのバグー伝説

今年の話の人物は、バグーことパトリシア・レーデル・ガルヴァン（1910年6月9日—1962年）であった。彼女は、サンパウロの裕福な家庭に生まれ、成人してからの社会的活動によって、ミューズ（民衆の女神）と讃嘆されている。その人となりや、ポスターやパンフレットから簡単に紹介したい。ポスターに映る彼女の面影は、憂いに満ちた、上目使いの大きな瞳が印象的である。

彼女はジャーナリストで作家、詩人、翻訳家、共産主義活動家と多彩で、モダニズム推進者の殿堂に位置付けられた人物である。

バグーというあだ名は、モダニストの詩人ラウル・ポップが1928年に、彼女に捧げた詩「ココ・デ・バグー」での発音の勘違いから生まれたとのこと。

彼女は1930年代から30年後の死の前夜まで、数え切れないほどの寄稿をした。共産主義活動によって投獄され、1940年に刑務所を出た。再婚し、ジャーナリストの夫とサントスに住む。共産党脱退後、そのジャーナリズム的論説は、イデオロギーがより濃密に、多面的になった。

その独特の観察眼や経験に基づいた簡潔な散文は単なるジャーナリズムを超えた芸術作品となり、1920年代のモダニズム運動、さまざまな左翼セクターの戦闘員、ブラジルのフェミニスト運動と直接関係している。

ワークショップは何処にもぎやかで、演劇、読み聞かせ、さらにはラップバトルなどもあったようだが、連日、午後からの激しい雷雨で会場移動は難しかった。

パラチー（地名は「フィッシュリバー」の意）というこの小さな町の道路はポルトガル船が本国の石を船底に積んでパラ

チーの港に下ろし、それを原住民と奴隷が敷き詰めた。ポルトガル船は同量の金鉱物を乗せて帰国した。その石畳の道路はV字型をしている。敷設当時は上下排水溝の役目も兼ね、排水は直接海に流された。

そのような道路に大雨が降るとどうなるか。急流の川と化す。参加者は、裾をからげて手をつなぎ、あるいはマッチョの背中におんぶされて向こうの軒先に渡るか、ショップで小間物を買って雨が止むのを待つ、ということになるのである。

国際祭り開催地は、雷が落ちると原始に戻る

雷が落ちたぞ！、町の電気が一斉に消えた。ちょうどレストランでジャンタ（ディナー）の最中である。

客は皆、呆気にとられている。そのうち戻るよ、といって一時間があったという間に過ぎる。暗闇の中で店主がローソクを立て始めた。待ちに待った料理が届く。エッ、どこで料理したの？ ウェイターは無言で走り回る。

そうです。ここには自家発電機設備の店が少ないのです。

それを設置している数件の店は、大勢が列を作っている。いつ順番が回ってくるの？ その間、客はひそひそ、ぼそぼそ、時々笑い声、暗闇の中で黙々と食べる…アツパレ！これが日本だったら最悪のムードがSNSでにわかには拡散され、非難ゴウゴウは間違いのないだろう。停電から数時間後、宿に戻ると、クーラーなし。窓は開けてはいけない。開けなくとも、部屋の隅には黒い大きな蚊が住み着いているのである。それとの格闘が今回の最も嫌な体験だった。そして、蒸し風呂状態の眠れぬ夜は、煌々と輝く太陽と共に明けた。

今後は、この沸騰地球のどこにも暑さから逃れられ

▲入場を待つ教師と生徒

るところは無いのだろう。しかし、パラチーの観光施設には、どうか町中に、文明の利器、自家発電機設置を懇願するばかりである。

パラチーの歴史を短く纏めると

1500年半ばにはパラチーの小高い丘に小さな集落が点在し、パラチ・ネイティブが定着していた。1667年にポルトガルによって植民地化され、その後ミナスの金鉱床の発見に伴って、金鉱山の主要輸出港になり、世界で最も豊かな港の一つとなった。しかし、貪欲な海賊の攻撃によって、町は衰退した。

一方、金鉱産業の衰退は農業に大きなビジネスチャンスを与え、中でも砂糖はすぐに主作物となり、サトウキビのしぼり汁を発酵させて作られた伝統的な酒「カシャッサ」の生産につながった。18世紀までに、200以上の砂糖農場と蒸留所が建設され、街が大いに潤った。1830年からはコーヒー生産と輸出によって一気に港は欧州とのゲートウェイとして大発展した。

さらに、19世紀に、リオデジャネイロとサンパウロの都市を結ぶ新たな鉄道と、歴史遺産リストに登録されたことにより人気の観光スポットに変貌した。

穏やかな入り江から川沿いを伝い、遠方には青々とした海岸森林の山並みに霧がかかって美しい。ここは、ブラジルで最古の町のひとつであり、かつては最も重要で繁栄した港のひとつであった。それらは、ロータリー・ド・オウロ（Rota do Ouro）の創設につながり、農業、コーヒー栽培は鉄道、高速道路敷設によって進展し、何と云っても、穏やかな先住民族によって支えられた、一枚の絵画のような美しい町である。



▲絵のような川沿いの風景



ブラジルの アフリカを訪ねて



脇さやか
(UniLibre 代表)

8月のパイア

誰も好き好んでは行かない8月のブラジル、日本の酷暑から逃げるように冬のブラジルを訪れた。なぜ8月かというと、北東部パイアでカンドンブレというアフリカ由来の宗教のお祭り「オルバジェ」が催されるためである。

パイア州の首都サルヴァドールは、ポルトガルのブラジルへの入植が始まった1500年代から、長きにわたりアフリカ大陸からの奴隷船の着陸地だった。メルカード・モデーロには奴隷収容所があり、世界遺産のペロウリーニョ広場は奴隷が石畳を敷き、見せめにされた場所である。ドリヴァル・カイミの歌の通り、パイアにはカトリックの力を示す365もの教会が存在するのだが、総本山ボンフィン教会の祭りも、カトリックとアフリカ由来の宗教が混合した「シンクレチズム」の姿を色濃く見せている。サンバやカポエイラも、アフリカから奴隷として強制連行されてきた人々が生み出してきた抵抗の文化なのだが、その背景のひとつに、西アフリカのヨルバの人々の口承で伝わってきた宗教「カンドンブレ」がある。風や雷、海などの要素を司る20の神様がおり、パイアの人々は「オリシャー」と呼ばれる神々を信奉し、今なお「目には見えない神々」と共に暮らしている。あの美味しいアカラジェは実は戦いの女神イアンサンの供物なのだ。有名なのは2月の海の女神イェマンジャーの祭りだが、8月に疫病の神様オバルアエの年に一度の祭りがあると聞き、サンパウロからパイアを巡った。

アフロブラジル博物館

サンパウロでは必ずイビラプエラ公園にあるアフロブラジル博物館を訪れることにしている。奴隷船を再現したオブジェ、精糖と奴隷労働の歴史、逃亡奴隷集団のリーダー・ズンビなど、ブラジルにおける黒人史を網羅しており、作家のマシャード・ジ・アシスやミュージシャンのミルトン・ナシメントにいたるまで、ここに来れば知りたいこと以上のことがわかるおすすめの間所である。



実は今回サンパウロにはもうひとつ目的があり、サンパウロ大学名誉教授で社会学者のヘジナウド・プランチ氏を訪ねて来た。彼はサンパウロじゅうのテヘイロ（祈禱場）を巡ってリサーチをし、口承で受け継がれた300以上のオリシャーの神話を著書「Mitologia dos orixás (オリシャーたちの神話)」にまとめた。既に英・伊・西訳版が出ており、私は著書を数冊翻訳していたのだが、日本でZINEで出版したいという希望を伝えたところ、快く許可してくださった。

多くの人はカンドンブレは知らなくとも、ウンバンダは聞いたことがあるかもしれない。ルーツは被るが異なる信仰で、どちらもなんだか怪しい密教で、呪いをかけられるんじゃないかと思われている節がある。確かに、映画「シティ・オブ・ゴッド」でも、殺し屋にマクンバ（まじない）をかけるシーンがあり、そういう輩もいるのだろうが、神話に登場する神々は夫婦で罵り合ったり、いつでも自分が一番美しくモテるとうぬぼれがすごかったり、お酒の飲み過ぎで使命を忘れてたりと、非常に人間的なところがあり、なんだか憎めない。

オバルアエはどんな神かというと、天然痘に罹ってしまい、身体の斑点が恥ずかしくて社会的になれず、内気で、全身を藁で隠している。天然痘治療の勉強に打ち込んで貧しい人々を治したという言い伝えから、疫病と治癒の神とされている。しかしそんな健全な一方で、妻の浮気を疑い、嫉妬して蟻塚に放ったり、DV夫のような恐ろしい面も持っている。

オバルアエの祭り

さて、オバルアエの祭りは22:00過ぎに始まった。最初は信徒達が神々を迎える祝詞を歌い踊って場を清め、続いて土の広場に場を移して、オバルアエの好物が振る舞われる。バナナの葉に包まれたお供えものがありがたく手掴みでいただき、部屋に戻ると爆竹と共にいよいよオバルアエが登場する。カンドンブレの神々は、儀式的場だけではなく信徒たちの暮らしの中に見えない形で常にいるのだが、この特別な日は、神々は信徒の体を借りて、華やかな衣装を纏い、猛烈なパーカッションと歌の中に迎えられ、可視化される。藁をまとった巨大な「只者ではない」神は、想像を超える迫力だった。大小様々なオバルアエが10柱くらい、文字通りわらわらと踊っている。特異としか表現しようのない風景だが、こうしてアフリカから連れてこられた人々は集い、自分たちの神々を讃え、信仰を守り続けてきたのだろう。

このようにパイアの人々は異世界との境目を行ったり来たりしながら生きてるように見える。ぶっ飛びな発想や言動も、すでに神話の古からあったキャラクターなのだろうな。それは「主人と奴隷」「貧富」「正悪」「物質と精神」などの対極するものに折合いをつけて来た、アフリカをルーツを持つブラジル人の、生き延びる術と力なのではないだろうか。「Axé アシェー」という神々の力が加わってパイア文化を創っている。「Ser baiano é outro nível (バイアーノでいるのはレベルが違う)」という言葉があるが、私はぶっどびバイアーノとバイアーノも、文化遺産だと思っている。



新刊書 新盤紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『構造人類学ゼロ』

(レヴィ=ストロース著、小川了・柳沢史明訳)

レヴィ=ストロースが主に英語で1940年代に発表した論文、研究ノート、調査報告を収録した一冊。彼が構造人類学者として確立する以前だからゼロというタイトルだ。「南米インディオにおける戦争と交易」「インディオの化粧」「ブラジル・インディオ間の親族語彙の社会的用法」「グアボレ川右岸の諸部族」などの論考の多くが『悲しき熱帯』に織り込まれているが、哲学研究者から人類学者へ成長するプロセスを読み取ることもできる論文集。(中央公論新社 2023年8月 352頁 税込み4,400円)

『料理と人生』

(マリーズ・コンデ著、大辻都訳)

フランス語圏カリブ・クレオール文学の旗手による自伝的回想録。料理と文学と人生、という三つの相互関係が縦横に語られている作品である。世界各

地の文化や文学を柔軟に吸収してきた彼女は、実は、ブラジルからの影響についても本書のあちこちで言及している。ジルベルト・フレイレから薫陶を受け、ジョルジ・アマードもパウロ・フレイレも読み込み、オズワルド・デ・アンドラーデの『食人宣言』から受けた衝撃については一章をあてている。(左右社 2023年7月 302頁 税込み4,180円)

『東京外国語大学 150年のあゆみ』 (東京外国語大学文書館編)

東京外国語大学の前身、東京外国語学校の建学は1873年。その150年の歴史を叙述した本書には、単なる大学史に止まらず、世界史と日本近代史との相互関係も巧みに織り込まれている。ブラジル笠戸丸移民の耕地通訳を担当した五人男のエピソードや南米移民に対応した葡語学科の設置、同科の70年代の増員についても簡潔な記述があり、今はなきエスペラント科と大杉栄の密接な関係も書き込まれている。読み応えある歴史書になっている。(東京外国語大学出版会 2023年11月 396頁 2,200円+税)

『蒸溜酒の自然誌』

(ロブ・デサル他著、内田智穂子訳)

メインの著者がアメリカ自然史博物館の学芸員という蒸溜酒百科全書。6大

蒸溜酒(ブランデー、ウォッカ、デキールとメスカル、ウイスキー、ジンとジュネヴァ、ラムとカシヤッサ)を中心に蒸溜酒の化学的解説から歴史、様々なエピソードまで満載。さらには蒸溜酒の未来についても。カシヤッサについては「カイピリーニャよりも地元民の多くはストレートを好み、フェイスジョアダをつまみにちびちび飲んでいる」と。まさに正論だ。(原書房 2023年10月 400頁 4,500円+税)

◆◆◆◆◆ 新盤紹介 ◆◆◆◆◆

『O Pandeiro e a Flor』 (Sakura com Rogério Souza etc)

19世紀後半からブラジルを主体に奏でられてきた音楽「ショーロ」を専門とする日本人パンデイロ(タンバリン)奏者、鶴澤桜のファーストアルバム。リオの老舗バンドのメンバー、ホジェリオ・ソウザらとの共演で、全曲ニテロイにてレコーディングしている。ショーロの持つ哀愁に満ちたリズムと旋律がなんとも美しい。宮沢和史と共演したマルコス・スザーノとは一味違うパンデイリスタSakuraに拍手! アルバムには坂尾英矩氏のコメント付き。(品番:SKRDP-20231 2023年12月 税込み3,300円) (注文はオフィシャルHP <https://www.sakuradopandeiro.com> にコンタクトを)

!!「ブラジルあれこれ」!!

『日本語が通じるアマゾンの片隅を旅する』～BBCのトメアスー報道をみる

英国の放送局BBCのポルトガル語サイトである『BBC NEWS BRASIL』は、2024年1月19日付で、『日本語が通じるアマゾンの片隅を旅する (Uma viagem ao pedaço da Amazônia onde se fala japonês)』と題する記事を掲載している。João Fellet 及び Felix Lima の二人の記者がパラ州トメアスー取材、現地関係者の話を交えた読み応えのある内容だ。約16分間の動画も添付されていてこちらもお勧めだ。BBCは、2020年8月にもトメアスー取材し、記事を配信しているが、この時に取り上げたのは、第二次世界大戦中にトメアスーにあった敵性外国人強制収容所に関するものだった(本誌2022年5月号コラムご参照)。

今回の記事では、1929年の第一回移民から始まる日本人移住の歴史、アグロフォレストリーや日系農場の後継者問題を取り上げている。第一回入植者の中で唯一の生存者である山田元さんのインタビューでは、入植時、ベレンで船を乗り換えてから、今日アスファルト道路で3時間余りで着く距離を船で12時間かけてトメアスーに到着したこと、入植当初は野菜作りをしていたが、現地の人たちに野菜を食べる習慣がなかったことから、「葉っぱを食べる日本人」として嘲笑的になったこと、1945年に故郷の広島に原子爆弾投下というニュースを聞いて、一家が絶望を体験したこと、1950年から60年代にかけての胡椒景気で、極貧状態を脱し、ようやく生活に明るさに戻ったことなど貴重な証言が語られる。アグロフォレストリーに関しては、小長野前 CAMTA (トメア

スー総合農業協同組合) 理事長より、もともとの農法は、単一栽培による胡椒生産が、胡椒の病気による壊滅の状況に陥った時、打開策を検討していた中で、川辺に住んで細々と家庭農業を営んでいた人々(ribeirinhos)が行っていた農業にヒントを得て考えついたもので、経済的な動機が先であり、環境問題への貢献は後からついてきたものである等のコメントが紹介されており興味深い。

小長野さんは、これまでブラジル各地においてこの農法の普及を目指す活動を継続されているが、地元のトメアスーでは、日系農家の子弟が、州都のベレンはじめ都会の大学に進み、トメアスーには戻りたがらず、このままいくとトメアスーの日系農場では、深刻な後継者不足に直面することになるという。

後継者問題に関し小長野さんは次のように述べている。「この素晴らしい農法は、世界の食糧問題の解決に大きな貢献を成すだろう。これまでも、国内だけでなく、他のラミ諸国やアフリカ諸国にも伝えていく。この素晴らしい仕事をするには、何も日系人である必要はない。自分だって、目は細いが、心はブラジル国民だ。」素晴らしい見識だと思う。

この記事のチェックは: (Amazônia: uma viagem ao pedaço da floresta onde se fala japonês - BBC News Brasil) (MK)



ベッティング (賭博)法の成立



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本弁護士連合会在ブラジルで勤務)

1. はじめに

本誌 2021年9月号において、eスポーツへのベッティング(賭博)を正面から認める法律はないと解説したが、2023年法 14790号(以下「ベッティング法」という)が2023年12月に成立し、オンラインゲーム(eスポーツ含む)への固定オッズによるベッティングが認められることとなった。

2. ベッティング法の概要

ベッティング法は、リアルスポーツイベント及びオンラインゲームイベントにおける固定オッズによるベッティングについてのルールを定めている。詳細なルールは今後財務省が制定する規則により明確になるが、以下ではベッティング法の主要な点を解説する。

(1) 許可の取得

ベッティング事業を行うためには財務省から許可を取得しなければならない。許可を取得するためには、ブラジル法に基づき設立された法人で本社と管理機能がブラジル国内にあり、株式の最低20%をブラジル人が有し、また、最大で3,000万レアルの手数料を支払う必要がある。許可取得のその他の要件については今後財務省が制定する。なお、すでにベッティング事業を行っている事業者に対しては、許可取得条件を満たすために最低でも6か月の期間が付与される。ベッティング事業者の支配株主がサッカー株式会社等のプロスポーツ団体の株式を保有することは禁止される。なお、ベッティング法では、ファンタジースポーツを「実在の人物のパフォーマンスに基づいてオンラインで争われるスポーツ」と定義しているが、ファンタジースポーツ業は許可取得を要求されていない。

(2) 内部規程、内部統制システム

事業者は、カスタマーサービス、マネーロンダリングやテロ組織への資金提供等の防止、ギャンブル依存症の防止、八百長の防止等に関する内部規程を設け、また、それを実施する内部統制システムを運用する必要がある。また、事業者はベッター(ベッティングを行う者)の本人確認を行うためのシステム(顔認証等)を導入する必要がある。

(3) 課税

事業者に対しては、ベッティング事業の総収入に対して12%が課税される(法人税やその他の一般的に課せられる税金(CSLL、PIS、COFINS及びISS)は別途課せられる)。ベッターに対しては、ベッティング(ファンタジースポーツベッティングを含む)により得た金額に対して15%の個人所得税が課せられる。

(4) ベッターへの情報提供

事業者は、ベッターに対して、ベッティングに負けた場合の金銭的リスク、ギャンブル依存症及び勝敗予想や賞金

の決定方法の条件に関する情報を明確な方法で提供する必要がある。ベッティングプロセスにおいて、曖昧な表現や抽象的な表現を使用することは禁止される。また、事業者は、ポルトガル語での無料カスタマーサービスを提供する必要がある。

(5) 禁止行為

事業者が、プロモーション等のために事前にベッターに何らかの利益を付与すること、ベッターが融資を得られるようにするために第三者と提携したり第三者のオフィスを自社内に設置することは禁止される。

(6) マネーロンダリング等の防止対策

事業者は、財務省が定める規則に従い、ベッティングにおいてマネーロンダリングやテロ組織への資金提供の兆候がないかどうかを監視・分析するシステムを導入し、また、マネーロンダリングやテロ組織への資金提供の疑いがある行為について当局に報告しなければならない。そのほか、事業者及び決済業者はベッティングに関連する情報を財務省が定める期間保存する義務、財務省がアクセス可能なシステムを使用する義務等が課せられている。

(7) ベッティングの決済サービス

ブラジル中央銀行の許可を受けたブラジルの金融機関のみがベッティングのための決済サービスを提供できる。なお、金融機関は許可を取得していない事業者と取引を行うことは禁止される。

(8) 検査費用

事業者は、収益に応じて毎月の検査料(最大1,944,000レアル)を支払う必要がある。

(9) 広告規制

ベッティングに関する広告についての詳細なルールは今後財務省が制定するが、ベッティング法は、ギャンブルを奨励しない旨の告知をすること、ギャンブルの潜在的な害についての情報提供をすること、未成年者をターゲットにする広告をしないこと等を規定している。また、ブラジルの広告自主規制評議会(Conar)は、ベッティング法の施行に伴い、ベッティングに関する広告規制を同会の広告自主規制コードに含めた。たとえば、ベッティングによりお金持ちになれることを示唆する広告や勝率について誤解を招くような広告を禁止している。なお、財務省は、アプリケーションプロバイダー、接続プロバイダー等に対して、不正な広告や違法ベッティングサイトの削除や遮断を求めることができる。

(10) 罰則

許可を受けずにベッティング事業を行ったり、許可を受けていない事業者の広告を行った場合等には罰則が科せられる。罰則は、警告、罰金(税金等を引いたあとの売上高の0.1%から20%、上限は20億レアル)、事業停止等がある。

PEC 45/2019 税制改正の成立



天野 義仁
(KPMG
ブラジルジャパン
デスク責任者)



三上 智大
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー)

ブラジルでは、2023年12月20日に、連邦・州・市の付加価値税を含む税制改正の基本文章で構成された憲法改正案が公布された。当案は7月に下院にて承認されていたが、11月に上院で修正された後、下院に差し戻され、再採決の対象となっていた。当該改正により制定された付加価値税の概要、今後のステップ、及び今後の留意点について下記にて概説する。

◆重複型付加価値税(Dual VAT)制度等の導入

- **CBS**(contribuição sobre bens e serviços、商品及びサービスに対する負担金)(連邦税)
連邦の負担金(PIS/COFINS)及び工業税(IPI)に代わるもの
- **IBS**(imposto sobre bens e serviços、商品及びサービスに対する税)(州・市税)
現行の州のVAT税(ICMS)及びサービスに対する市税(ISS)に代わるもの
- **IS**(imposto seletivo、個別消費税)(連邦税)
健康及び環境に有害な商品の消費を抑制する目的とした税金を連邦税として創設

◆今後のステップ

- **2024年～2025年**
細則を規定した補足法の制定、税金に関する一般法の制定、CBS及びIBSの納付システムの開発
- **2026年**
CBSを0.9%、IBSを0.1%の税率で試験的に導入(PIS/COFINS及び他の連邦税と相殺可能)
- **2027年**
CBSの納付開始、PIS及びCOFINSの廃止、IPI税率を0%に引き下げ(マナウス・フリーゾーン除く)、ISの創設
- **2029年～2032年**
IBSを導入し、税率を段階的に引き上げつつ、ICMS及びISSの税率を引き下げることにより、ICMSとISSをIBSに移行
- **2033年**
新制度への完全移行

◆今後の留意点

- **規制に係る細則**：PEC45/2019の様々な細則は、2024年から2025年にかけて制定される予定となっている補足法によって初めて明確となる。従って、納税者は今後施行

される細則を待ちつつ、ビジネスへの影響に注意する必要がある

- **税負担の増加**：ISが2027年に創設されることに伴い、ICMSとISSの納付額は、課税標準にISが追加されることから、現行よりも税負担が高くなることが予想される
- **Dual VATの税率**：政府の試算ではCBSとIBSを合わせて27%とされているが、まだ決定されておらず、今後の決定に期待が寄せられている。各セクターへの影響は活動内容により異なる
- **完全な非累積性への制限**：個人使用や消費のための商品のクレジットに関する規制について曖昧であり、法的紛争につながる可能性がある
- **ICMSの累積クレジット**：ICMSのクレジットが累積している企業は、回収の権利を確保するため、これらのクレジットの価値について承認を得る必要がある。承認されたクレジットが移行期間終了まで相殺されない場合、20年かけて還付される
- **IPI、PIS、COFINSクレジット**：これらの連邦税の還付については、まだ明確な規定がないため、クレジット残高がある納税者は、移行期間前にクレジットを使い切ることが推奨される
- **ERP**：2026年以降、2つの税制が併存することから、複数のERPの使用又は既存システムに両制度への対応に向けた改修を行う必要がある。また、当該項目についてはアウトソーシング(外注/コソーシング)を検討する価値があると思われる
- **申告書類**：納税者は、人、プロセス、システムの改修を必要とする新しい形式の申告書類に備えなければならない
- **人材の研修**：税務専門家は、日々の業務と並行して、新たな税制のルールを学ぶ必要がある。また、購買、販売、財務、生産などの他部門の専門家も、税制改正がそれぞれの分野に与える影響を理解するための研修が必要となる
- **契約関連**：企業は、価格転嫁、競争力のある価格の維持などの課題について、サプライヤー及び顧客との契約において、税金の影響を受ける契約条項を再検討する必要がある

ブラジルコストと言われる移転価格制度の改正に続き、2023年末には付加価値税の改正がなされ、長年続いた独自のブラジル税制が歴史的な転換期を迎えている。当年度は直接税の改革について議論されることが予定されているが、ブラジルにおけるビジネス環境の改善につながる改正を期待したいところである。

ブラジル音楽が紡ぐ人脈

by DJ ATSU-C

「この曲、本当にブラジル音楽？」深夜のレコードバー。カウンターから覗き込むようにしてこんな言葉を掛けられると、その日の使命はほぼ終えたと密かに安堵する。R&Bやジャズ、ロックなどに造詣の深い音楽通で賑わうこの店の常連たちにブラジル音楽の多様さ、奥深さを知ってもらえればとの思いで向かうDJブース。漆黒の溝が紡ぎ出すブラジルの調べは、この国の音楽が持つ濃厚な人と人とのつながりをも映している。

渋谷の隣町ながらも喧噪とは程遠い池尻大橋のレコードバー「ROUTE-1」を拠点にひたすらブラジル音楽を流す「Brazilian Night」を不定期に主宰して2023年11月で2年が経った。もともと人前でDJのようなことをすると想像すらしていなかったが、発端は音楽でつながった人脈だ。米国のベテラングループ「Steely Dan」のカバーバンド「The Route-1 Band」でベーシストとして約6年間一緒にいる写真家でギタリスト、ボーカリスト、バンドリーダーにしてROUTE-1オーナーの毛利充裕氏から、欠員が出たDJ役として急遽依頼されたのだ。

幸いなことに手元には2000~04年のサンパウロ駐在時に日曜市で買い集めた中古アナログレコードがあった。Djavan, Elis Regina, Caetano Veloso, Gal Costaら、いわゆるMPB(Música Popular Brasileira.ブラジルのポピュラー音楽)のアーティストを中心に買いそろえたままほぼ死蔵していたものが、ようやく陽の目を浴びた。マナウス産の薄くて頼りないレコード盤同様、覚束ない腕前でスタートしたBrazilian Nightだったが、当初から常連あるいは音源提供者として手を差し伸べてくれているのがサンパウロ時代から近所付き合いのある世界的バーカッション奏者の安井源之新氏だ。

安井氏は学生時代からプロ奏者として活躍。坂本龍一氏のレコーディングセッションや、米国のトップドラマーSteve Gaddらとのライブツアーなどで音楽史に名を刻み、2024年1月にはピアニストのクリヤ・マコト氏とのユニットRHYTHMATRIXで新譜「BRIGHTNESS」を発表したばかり。完成前のラフミックス音源を大音量でかけさせてもらったこともあり、自分では何もしていないもののアルバム完成時には心に期するものがあつた。

サンパウロ時代にはその安井氏の紹介で知り合ったミュージシャンも数多い。シンガーソングライターでギタリストのFiló Machadoは大スターDjavanと名曲「Jogra!」を共作するなどMPB界の第一人者。日本でも大人気の米ファンクバンドEW&Fを思わせるような派手なホーンアレンジが印象的なFiló Machadoの「Quero Poco, Quero Muito」は、Brazilian Nightでも高頻度で使用するコンピレーションアルバム「Too Slow To Disco Brasil」の劈頭を飾る。このコンピレーションアルバムを監修しているのが、やはりシンガーソングライターのEd Motta。日本の音楽プロデューサー大沢伸一氏のほか英ジャズファンクグループIncognitoなどと共演歴があり、日本のポップスやジャズに通暁した異形の音楽マニアでもある。2013年のブルーノート東京でのステージではファ

ンク、AOR調の自身のレパートリーに加えて山下達郎氏の「Windy Lady」を日本語で披露してファンの度肝を抜いた。

歌詞はポルトガル語ながら、曲調はファンク、ディスコ、R&Bの混合型でジャンルのには「Brazilian Boogie」と呼ばれるFilóやEdの曲の数々でお店の空気が温まってくると、店内の音楽通から冒頭のような発言が飛び出すわけだ。ブラジルと言えばサンバ、ボサノバ、といった固定観念を超越し、耳の肥えたR&Bやジャズ好きをうならせるブラジル人アーティストの現役筆頭格と言えるのはIvan Linsだろう。

日本のシンガーソングライター椎名林檎氏をして「その才能に嫉妬する」と言わしめたIvan Linsが世界的知名度を上げたのは、Michael Jacksonの一連の大ヒット曲で知られる米プロデューサーQuincy Jonesの1981年のアルバム「The Dude」に収録された「Velas」。その後も浮遊感漂う独特のメロディーとコードワーク、そして歌声は世界中の聴き手だけでなくアーティストまで魅了し続けてきた。

彼を巡ってはこんな伝説めいたエピソードがある。ジャズ界の帝王の名をほしいままにしたMiles DavisがIvanの曲だけでアルバム1枚をつくりたいと音楽プロデューサーに電話したというのだ。残念ながらMilesはその3カ月後に他界し、プロジェクトは幻に終わる。真相を探るべく、現在はポルトガルに住む当該プロデューサーJason Milesに問い合わせたところ、以下の回答を得た。

「電話ではなく、Milesのマンションで彼がIvanからもらったというテープと一緒に聞いているときのことがあった。Milesから「Quincy JonesがIvanのカバーアルバムをプロデュースしようとしている。君も一緒に参加しないか」と言われたんだ。残念ながらMilesの死で実現はしなかったけれど……。QuincyのプロデュースでMilesがIvanの曲を奏するという夢の大プロジェクトは形を変え、JasonのプロデュースでIvanの曲をポップス界のスターらが歌うというアルバム「A Love Affair: The Music Of Ivan Lins」として約10年後に結実した。このアルバムでシンガーソングライターのStingが歌った「She Walks This Earth (Soberana Rosa)」は2001年にグラミー賞最優秀男性ポップ・ヴォーカルを受賞している。

音と人にまつわるこうしたエピソードの一つ一つが音楽を引き立てるスパイスとなる。時代、ジャンルを超越し、人と人とを結びつけるブラジル音楽。その魅力のごく一部でもお届けすることができるのは新米DJとして望外の幸せである。

※読者の皆様の検索の利便性を考慮し、文中の外国人人名は敬称略のうえ現地表記に従った。



●フォーリャ紙による年末政治家採点

主要な政治家の中で、2023年における勝者と言えるのは、アダッジ財務相(PT)、リラ下院議長(PP)、バシエコ上院議長(PSD)、アルコールブレ上院議員(União Brasil)、アエシオ・ネーヴェス下院議員(PSDB)及びディーノ法務治安相(PSB)及びカサビ・PSD党首である。敗者は、ボルソナーロ前大統領(PL)、ゼマ・ミナスジェライス州知事(Novo)、レイテ・リオグランデ・ド・スル州知事(PSDB)、リラ・ベルナンブーコ州知事(PSDB)、マリナ・シルヴァ環境相(Rede)及びセルジオ・モーロ上院議員(União Brasil)である。ルーラ大統領(PT)、アルキミン副大統領(PSB)、ミシェーレ・ボルソナーロ前大統領夫人(PL)、フレイタス・サンパウロ州知事(Republicanos)、ホフマン・PT党首は、勝者でも敗者のどちらでもないと言える。(12月30日付フォーリャ・デ・サンパウロ)

●地方選挙

選挙高等裁判所(TSE)は1月7日、本年10月の地方選挙に関する日程を発表した。主な日程は以下の通り。尚、TSEは、選挙運動における生成AIの使用等に関する規則を検討中。

- 3月7日~4月5日：所属政党の変更新間(janela partidária)
- 4月6日：政党及び政連合の登録期限終了、候補者の所属政党及び選挙区の確定。
- 7月20日~8月5日：党大会(候補者の公認)の実施

- 8月15日：候補者の登録終了
- 8月16日：オンライン環境における選挙運動開始
- 8月30日~10月3日：政見放送
- 10月6日：第1回投票
- 10月27日：決選投票(8日付コレイオ・ブラジリエンセ)

●ルーラ外交についての識者による批判

ルーラ政権の外交政策に関し、マルシオ・コインブラ Instituto Monitor da Democracia 代表(伯政府機関関係協会(Abrigo)副会長)は、「国際社会への復帰を果たしたことは成果であったが、安保理改革等、時代遅れで、誰も議論していないテーマに固執し、伯が環境分野で何ができるのか等、真に重要なテーマは疎かにした」と批判している。マリストエラ・パソ・サンパウロ大学教授は、「ルーラの外交政策は、人目は引くものの、戦略性に欠けている。指揮者のいないオーケストラのようなものである。外遊を重ねたが、短期的な成果を上げることはできなかった。(ルーラの)失言やアドリブによる発言により、伯のソフトパワーを高めることはできなかった」と批判。バルボーザ元駐米大使は「ルーラは、COP30の誘致に成功する等、環境面では一定の成果を上げることができたが、ウクライナ紛争やベネズエラに関しては失言が目立った。アルゼンチンのミレイ政権との関係構築、ベネズエラとガイアナの領土問題が今後の課題となる」と述べた。(1月14日付コレイオ・ブラジリエンセ)

ジャーナリストの旅路

ブラジルはどれだけ食に恵まれているのか

山口貴史
(TBSテレビ サンパウロ通信員)

日本人にとって、ブラジルでは食べ物に苦労しない。何を食べても美味しいからだ。特にサンパウロでは、美味しい和食レストランも多く、日本食材も豊富に手に入る。以前は日本へ一時帰国する時に、スーパーで大量の日本食材を買ってブラジルへ戻っていたが、今ではリベルダージのスーパーに行けばなんでも手に入る。スーツケースを食材で満杯にして帰ることも無くなった。ブラジルは、心底日本食材に恵まれていると思っている。

最近ハマっているのは、サンタカタリーナ産の牡蠣だ。「オストラ・ジャポネース」という商品の真牡蠣をいつも3ダース購入する。金曜日にフロリアノポリスの牡蠣の養殖場から空輸で自宅へ届く。食べ放題に並ぶ牡蠣と比べてひとまわり粒も大きく食べ応え十分だ。値段も一つあたり日本円で150円ほどとお手頃だ。

あとは、日本人が作る手作り餃子とシュウマイは、薄皮に身がぎっしり詰まっていて日本のものと瓜二つ。本当に美味しい。注文すると自宅まで配達してくれる。

鯉のたたきを作ってくれる日本人もいる。お店の方から「鯉のたたき作りましたよ」と連絡を受けた時は、毎回8冊買うようにしているが、1ヶ月ほどであつという間になくなる。

新鮮な生魚を配達してくれる人もいる。サーモンを一匹買っても、刺身用に綺麗に捌いて配達してくれる。ここでは、ウニやいくらだって買える。

豆腐、味噌、醤油、納豆、大根、ほうれん草、ごぼうなど、日本人が好んで食べる食材はもちろんある。先駆者である日本人移民の努力の賜物だ。最大の敬意を表したい。

また、近年和食レストランは増えた。クリチバで食べた日本風焼肉は最高だった。サンパウロでしか食べられなかったラーメンも地方都市でも、なかなか美味しいラーメンが食べられるようになった。和食を熱弁したが、ブラジル料理はいつもお気に入りだ。日本に一時帰国した際、ブラジル料理がついつい恋しくなって、シュハスコレストランに行ってしまうほどだ。

サンパウロにいと、あらゆる国の料理を食べることがができる。個人的には、韓国人街にあるギリシャ料理がおすすめだ。たくさんの日本人をブラジルでアテンドしたが、食に関しては誰一人文句を言う人はいなかった。以前ラジオに出演した時、ブラジルの食を熱弁したのだが、スタジオから信じられないという反応だったので驚いた。

ブラジルは聞くと見るとでは大違いである。

クレオール文学作家 マリーズ・コンデとブラジル文学

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）



カリブ・クレオール文学の背景

300年以上にわたって続けられた黒人奴隷貿易によってアフリカから南北アメリカ大陸へ連行されたアフリカ人の数は、現在の歴史研究者が定説と認めている推定値では、少なくとも1千万人という途方もない数である。この数字の40%以上を受入れた世界最大の奴隷輸入国がブラジルであったが、それを若干下回る400万人弱が送り込まれたのがカリブ諸国（キューバ、ジャマイカ、ドミニカ、ハイチ、バルバドスなど）であった。

英国やフランス、スペインなどによって植民地化されたカリブ諸島出身の黒人知識人たちは、20世紀に入って、様々な黒人意識回復運動、黒人アイデンティティ確立運動を展開するようになる。代表的な事例をあげれば、英語圏におけるパンアフリカニズム運動は20世紀初頭から始められたが、フランス語圏におけるネグリチュード運動は1930年代から広がりを見せる。

このネグリチュード運動の機関誌的な雑誌として1947年にパリで創刊されたのが、『ブレザンス・アフリケーヌ（アフリカの存在）』誌であったが、この雑誌編集にも関与しながら文学活動も展開するようになったのが、後にクレオール文学の旗手と見なされることになる黒人女性作家マリーズ・コンデである。

作家マリーズ・コンデ

1934年フランス領グアドループで生まれた彼女は、十代半ばで本国フランスへ移り、ソルボンヌ大学で英米文学専攻、青年期の彼女が最も影響を受けたのはマルチニク出身の詩人エメ・セゼールであった。ネグリチュード運動の主導者でもあったセゼールと同様にアフリカ系黒人としてのアイデンティティに誇りをもっていたコンデは、博士論文を書き上げてから、ギニア人と結婚し西アフリカ（ギニア、セネガル、ガーナ）で10年ほど滞在したが、フランス語教師業と並行して作家活動も進め、米国に移ってからはコロンビア大学教授として比較文学を講義する、といった二足の草鞋を履き続けた作家・知識人であった。

彼女の作品のうち、『生命の樹』、『わたしはティチューバ』など6作品が邦訳されているので、筆者もそのうちの何冊かは読んでいるが、なかでも一番熟読したのが2001年刊行の『越境するクレオール』（岩波書店）であった。この一

冊は、日本で独自に編集されたもので、いくつもの講演やエッセイが収録されているが、この中で「私はカリビアンに生まれたのではない、カリビアンになったのだ。」と語る部分の含意する奥深さに圧倒された。

言うまでもなく、この一文は、ポーヴォワール『第二の性』の「人は女に生まれるのではない。女になるのだ。」をモチーフにしていることは明らかだが、三つの大陸の文化を柔軟に吸収しながら多くの内的葛藤を経て「フランス人でもなくアフリカ人でもなくカリブ人」であるとのアイデンティティを獲得したのであった。

自伝的回想録『料理と人生』

そんな彼女の邦訳最新刊『料理と人生』（左右社、2023年7月）もまた、魅力的な自伝であり、料理と文学と人生、という三つの相互関係が縦横に語り尽くされている作品である。

フランス語や英語で世界各国の文化や文学を吸収してきた彼女は、実は、ブラジルからの影響についても本書のあちこちで言及している。ジルベルト・フレイレから薫陶を受け、ジョルジ・アマードの文学作品もパウロ・フレイレの教育思想も読み込んだ由で、なかでもオズワルド・デ・アンドラーデの『食人宣言』から衝撃的な影響を受けたと、この自伝の13章（章のタイトルは「人喰いか否か、それが問題だ」）で詳しく語っている。

『「食人宣言」は人を喰った偶像破壊的なテキストで、重厚なテーマへの洒落と悪趣味な言葉遊びに溢れている。その口調と内容両面で、この本は直ちにわたしの聖書となり、お気に入りの本に加わった。』として、その章の結語は、「カニバリズムの理論は芸術のあらゆるジャンルに当てはまるということではないか。以来、自分で深めつつある考えのなかで、新たに見つけたこの理論が大きな位置を占めることになる。わたしはこれに、『文学のカニバリズム、すなわち新奇で衝撃的なメタファー』と命名した。』というものだ。

『「食人宣言」は揶揄を用いたセラピーであり、同時に植民地文学の複雑さへの深い考察なのである。』とまで言い切っているが、カリブで生まれた黒人女性作家が近代欧米文学をフランスの最高学府で学び、編集者としても語学教師としても大学教授としても働きながら自身のカリブ・クレオール性を確認していった過程においてブラジル思想・文学が大きなインパクトを与えたというファクトには深い感慨を覚えざるを得ない。



エミレーツ航空が、 南米を近くする。

リオデジャネイロ*
サンパウロ

ブエノスアイレス

FLY BETTER

エミレーツ航空は、サンパウロ、リオデジャネイロ*、南米のブエノスアイレスを含む全世界150以上の都市に就航。
シームレスな乗り継ぎで、よりスムーズで快適なビジネストラベルをお楽しみください。

ワンランク上の空の旅へ。エミレーツ・ビジネス

Emirates

水泳・競泳
HIROKO
MAKINO

マラソン
YUKI
KAWAUCHI

スキー・ジャンプ
RIKO
SAKURAI

パラ水泳
CHIKAKO
ONO

パラ陸上(やり投げ)
TAKUYA
SHIRAMASA

車いすバスケットボール
AMANE
YANAGIMOTO

車いすバスケットボール
KEI
AKITA

CHALLENGE

ワクワクするような挑戦を

あいおいニッセイ同和損害保険は、挑戦するアスリートとともに成長していきたいという想いのもと、
全社員が一丸となって、スポーツ支援を行っています。

立ちどまらない保険。

MS&AD あいおいニッセイ同和損保

CAFÉ
**FAZENDA
ALIANÇA**
SPECIALTY COFFEE
SINGLE ORIGIN



Encantando os paladares mais exigentes
O café produzido no município de São João da Boa Vista que fica na região centro-leste de São Paulo, pelo empresário Renato Ishikawa, é cuidadosamente elaborado a partir de grão 100% arábica, selecionado a cada lote e possui certificados internacionais de qualidade (Rain Forest Alliance e UTZ), e além disso, preocupado com a proteção ambiental, preserva 30% da mata virgem onde a exigência legal é de 20%.

コーヒーを愛する人への極上の一時
サン・ジョアン・ダ・ボア・ヴィスタ市(サンパウロ州の中央部)で、日系実業家石川レナト氏の農園で生産されたコーヒーは、ロットごとに選別された100%アラビカ豆から丁寧に作られており、厳しい国際的品質証明書(レインフォレスト・アライアンスとUTZ)を取得しています。さらに、環境保護法でコーヒー農園に課せられている20%の森林保全に対し、30%を保全し、環境にも配慮しています。

日本代理店

ミカド珈琲店 日本橋本店

ミカドコーヒー 日本橋室町三井タワー店

ミカドコーヒー 軽井沢旧道店

ミカドコーヒー 軽井沢 プリンスショッピングプラザ店

ミカドコーヒー 軽井沢ツルヤ店(スーパーツルヤ軽井沢店)

株式会社ミカド珈琲商会

サザコーヒー筑波大学アリアンサ店

オンラインストア <https://mikado-coffee.com>

住所

東京都中央区日本橋室町1-6-7

東京都中央区日本橋室町3-2-1, 日本橋室町三井タワー5階CAFE & BIZエリア

長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢786-2

長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1178-798

長野県北佐久郡軽井沢町長倉2707

東京都港区三田2-21-8

茨城県つくば市天久保3丁目1

ブラジル・サンパウロでお住まいをお探しでしたら
コジロー出版不動産部にお任せください

日系進出企業の駐在員が多数住むサンパウロ市パライズ地区の
優良アパートをご紹介します。

内覧からオーナーとの交渉、契約書締結、お部屋のリフォーム
家具の購入、入居手続きの立ち会いまで全て日本語でサポートいたします。

フラットホテルの手配も行っております。

ブラジルへ渡航される前にお気軽にお問い合わせください。

↓ お問い合わせ (日本語どうぞ)



LINE +55 (11) 99478-2433

✉ ed.kojiro@gmail.com

物件の写真はこちらでご覧になれます → https://note.com/pindorama_re | [@pindorama.real.estate](https://www.instagram.com/pindorama.real.estate)

ふせなおすけ
担当 布施直佐 (不動産仲介業者)
不動産業者協会登録番号 (CRECI)
258600-F



Leading You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様へ万全のサポートをご提供しています。

NISHIMURA & ASAHI

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



www.nishimura.com

お問い合わせ

latinamerica@eml.nishimura.com

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也
ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf
Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta*1 Kuala Lumpur*1 New York Singapore Taipei Yangon *1 Associate office

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

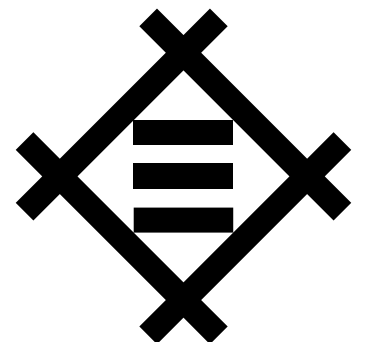
現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

[Business innovation-3]

自動車リースで、社会をもっと便利に、もっと豊かに。

中南米最大の自動車市場ブラジルで、トヨタと共に B to B 向けリース事業“KINTO”を展開。
カスタマイズ自在のサービスで、社会全体の「保有」から「利用」という動きに応える。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.